

あそ

4

2023



寄稿

亀田虎童子

大佛をおどろかしたる猫の恋
何食べて大きくなりし鴨帰る
この仔猫掴めば掴み通せさう
死水に欲しき水湧く春の山
草の名のあはれままこのしりぬぐひ
百近く生きて五勺の花見酒

四月集

といふ

佐藤 竹僊

踏切をしづかに師走のチンドン屋

むかし私もサンタクロース置こたつ

青葱の三重に畳まれ賣られぬる

枯草に觸りて野梅咲いてゐる

鳥歸るコロナウイルスさまさまに

紅梅を左に置かれ男の顔

目をよぎる蜘蛛の一絲に春を知る

杖突けば犬が啼くなり露の臺

笑顔といふ不可思議なもの露の臺

春雪に注意報ありメガネ拭

ほとんど駄句ときをり名句牡丹雪

緞帳の菊もあやめも春爛漫

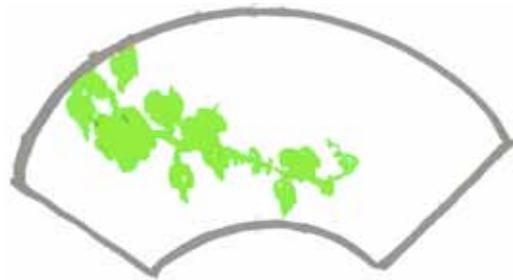
耕して何もつくらず風光る



花の降る

秋川 泉

野遊びや花輪の子山羊従へて
腰越の浜に若布のふかみどり
たはむれて若布をひろふ朝の浜
ふんはりとゆっくり香るあをさ汁
滅入った日フライパンの浅蜷はぜる
空を飛ぶ力士の無念春の場所
孤高なるひと佇みて花の降る
花冷や雨降りつづき猫ねむる



津軽・下北

七郎衛門吉保

雪壁の道七曲り行く酸ケ湯
栗鼠も落つ二尋越ゆる雪の壁
寒威かなホワイトアウトの八甲田
津軽にはガン吹きの如雪の降る
みちのくに訪ねし外湯氷点下
下北や蛸烏賊晒し冬籠
寒潮に挑む一艘大間沖
白インクの詩集に見えし枯木山



乳姉妹

篠田純子

ロボットの運ぶチョコパフェ茎立ちぬ

「さっちゃん」と吾れ乳姉妹^{ちきょうだい}豆の花

弾き初めや「さっちゃん」は琴吾は三味線

小禽の弾む梅が枝牛天神

頼朝の腰掛け石や春寒し

野遊びや一郎さんのハーモニカ



スニーカー

篠田大佳

春めくや瓦礫も疾うに無くなつて

思ひ出し笑ひの吐息うららけし

砂利の春底薄くなるスニーカー

霊苑の雨の字消えて冴返る

空缶を集め教祖に見惚る春

万雷の拍手の生みし椿かな



雑詠

須賀敏子

5回ものワクチン打って春の旅
瀬戸内の島の重なり遠霞
ペダル漕ぎ島を巡れば山笑ふ
瀬戸内に大きなドック風眩し
倉敷や行き交ふ人に花時雨
下山後の十割蕎麦に花菜漬
先島に新たな基地が花の頃
三月や車を持たぬ日常に

梅の花

都築繁子

若者の確かな歩幅街二月
一期生の娘の母校梅白し
梅の花閨魔堂にも光満つ
捕まらぬ詩片きらきら春の雪
春光や侍ジャパンの絵馬を見る
余寒なお電子音鳴る厨事



仲春

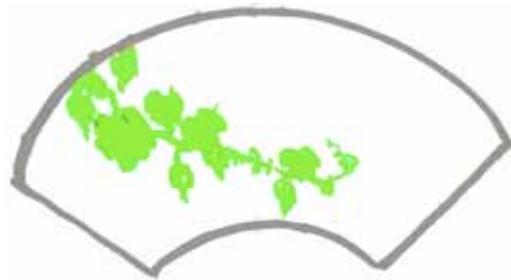
長崎桂子

冴返る蒼もじもじためらふて
冴返る早めの湯舟身を庇ふ
金星と木星近付きし春の宵
早咲のオオカンザクラ花盛り
弥生の満月や青年の歓喜
時ならぬ花火や春宵の人出
三月や庭の草花はや開花
若き日のソフトボール思ふ春分

雑詠

森なほ子

曇天に声を絞りて冬の鳥
桜木の幹光りだす二月来る
寒明くる雲の多さもそれらしく
料峭やむかし長女の住みし街
セールの服路にせりだし春北風
ゴミ捨ててまだ下手くそな初音聞く
紅梅やみな髪長く女の子
昼月になりたく早春の気球



裸木の片方かたへに並ぶ雪の翼

『じよつぱり』はやはり辛口雪は霏々

樵の実の殻点々と雪の壁

酸性泉に強弱のあり斑雪

弘前の林檎しみじみ優しくて

陸奥の浜並ぶ風車や春を待つ

名にし負ふ大間のまぐる笑みこぼる

帰り来し庭に残雪一摘み



二月号作品より

篠田大佳・森なほ子・佐藤喜孝

逃げるたび翅つよくなる雀の子

亀田虎童子

「雀の子」を詠むとなぜか心が優しくなるのはなぜだらう。みんな一茶になってしまふ。そしていつのまにやら子雀を応援してゐる。掲句、人生訓のやうである。もちろん作者はそのやうなことを計算してはゐない。「おそろしい目にあつてゐる雀の子 佐藤竹僊」ではないが、攻撃能力を保持しない雀は子は勿論、親も三十六計逃にげるに如かずである。(喜孝)

赤馬の鼻で吹きけり雀の子

一茶

蠅うちになる雀の子飼哉

河瓢

親よりも大口でか糞雀の子

和田魚里

龍角寺古墳に生れ雀の子

高島茂

巢立ちと共に猫、カラスなどに追われる立場となる雀の子。追われて必死に逃げるうちに、ひ弱だった翅も否応なく強くなっていく。自然界の厳しさと、雀の子を応援する作者の暖かい眼差しがあります。(なほ子)

ドラマのタイトルにもあった「逃げるは恥だが役に立つ」をふと想起しました。調べるとハンガリーの諺のようですが、諺の意味するところははつきりとしません。体躯の小さい雀には危険がたくさんあります。全身を使って敵から逃げることで心身が鍛えられたように思います。掲句に詠まれた雀も翅だけではなく、心も逞しく育ったと見えます。(大佳)

おほひなる膝頭あり古都の春

佐藤竹僊

この膝頭は大仏のものと思うが、意表を突かれる。大仏の膝頭を見たことがある、と自信を持って言える人はそういないと思います。私も奈良と鎌倉の大仏の画像をチェックしてみたが、そう変わった膝頭ではなく、ちよつとがっかりしました。ゆつたりした古都の春と大きな膝頭がなんとも面白い取り合わせだと思います。(なほ子)

舟着場と舟との隙間春きざす

佐藤竹僊

「舟」の字は、川を流れる渡し舟や屋形舟など、小型の船舶を想像させます。童心を思い返すと、乗り物と乗降場の隙間というのが怖くて、臆病だったことを思い出します。作者は、水陸の境界にある隙間に詩情を見つけ、小さな春のきざしを味わっています。水陸と季節の境界が重なって、響き合っているようです。(大佳)

オーロラを見てきし人の冬帽子

森なほ子

オーロラに近付いたというだけで、帽子の色に何か影響があったのではないかと、想像を膨らませられる句です。そうでなくても、オーロラを見る旅に同行したという帽子は、冒険をしてきたすごい帽子という感じがします。旅に対する敬意が、掲句から見えます。(大佳)

夕月はピンクゴールド降誕祭

森なほ子

生誕祭だけでは誰のことだか分からないが、降誕祭は「聖人や偉人などの誕生日を祝う祭典」とあるが一般人にはキリストのことであらう。雪月花といはれ古来より月は詠み継がれて今に至る。月の色をピンクゴールドと詠んだのは寡聞にして知らない。宗教とは離れたクリスマスのはいにはピンクゴールドが合ふやうだ。ちなみに広辞苑第六版には「ピンクゴールド」は載ってゐなかつた。(喜孝)

冬茜切り絵の貨車の浮かびける

赤座典子

切り絵の貨車というのは、冬茜に照らされた貨車の影のように見えました。切り絵の持つ、暖かさ、不気味さ、そして寂しさが写実的な光景と重なって、風景により深い情趣を与えます。(大佳)

霜柱はらり傾き花蕊めき

赤座典子

典子さんの比喩はいつも見事で畏れ入る。よくものを見届ける目を具へてゐる。霜柱の新しい美の発見。「花蕊」は意味は分かるが読み方を知らずこの句によつて教へられた。これからは「めき」を云はなくとも済むかもしれないと推敲されるのもよい。たとへば「霜柱はらり傾き花の蕊」。(喜孝)

あらららら猫と目の合ふ日暮かな

秋川 泉

上五の「あららら」に、猫と目の合うときの驚きが表れています。目が合った時の猫の表情と猫を見つけた人間の声を通じ合っているようです。猫を見つけた場面が夕方の雰囲気によく合っています。(大佳)

冬夕焼異世界の道表れる

秋川 泉

夕焼は四季に見られるが夏の季語になつてゐる。掲句は「冬夕焼」、他の季節と違ひ透明感を覚える。この句の世界に合つてゐる。広大な夕焼の中にゐる時の感動が伝はる一句。

「あらはれる」は使ふ漢字により意味が異なる。「現れる」は、今までなかったものが姿を見せる。「表れる」は、隠れてゐたものが表面化する。「顕れる」は、よくないことが公になる。と使ひ方がそれぞれある。この句は「現」がふさはしいと思ふ。またひらがなで「あらはれる」もある。(喜孝)

冬に入る棚に溢るる色長靴

七郎衛門吉保

作者はよく新潟県に行かれるので、この句もそちらの句と思う。冬は天気の良い日が続き、幼稚園か、小学校の玄関の棚(昔の下駄箱)は色とりどりの小さな長靴が並ぶ。昔と違いカラフル。これを「色長靴」の一語でまとめたのはさすがです。(なほ子)

山茶花やさんざ散り落ちまた咲けり

七郎衛門吉保

山茶花の花期は十月から十二月とのこと。他の花に比べて長い花期だ。この長い時をかけ山茶花は咲いては散ることを繰り返す。そのことを詩的に表現された。「山茶花」「さんざ」と近似のひびきで句に弾みをつけられた。この句を読んでみてふと多摩墓地の百日紅の大樹を思ひ出した。(喜孝)

里芋の皮剥き残る母の汁

篠田純子

少し分りにくいのは、剥くは他動詞で残るは自動詞だから。しかし「剥き残す」だとわざと残したようになるので、こうなったでしょう。里芋を完璧にきれいに剥くのはなかなか手間がかかる。忙しい母の里芋汁は少し皮が残ったおかげで、娘の一句となりました。(なほ子)

私の母は料理が不得手であった。これは父の舌によるところが大。父は砂糖を少しでも煮物に

入れると怒り出す。それなのにごはんは砂糖をかけて食べることはできた。この状態では料理が上手くなるはずはない。だが母の煮物には味よりも料理に食すことができない異物が間々入ってゐた。

里芋の剥き方が完璧でないくらいは、この句のやうに良き思ひでに繋がることである。(喜孝)

しぐるるやバスのまぼろし見て奔る

篠田大佳

降りだした雨に傘もなく歩いてみると、はるか向こうにバスらしきものが見えた気がして、必死に走ります。本当にバスだったのか、作者は間に合ったのか……。 「まぼろし」の一語と「奔る」の字に夢の中のような切迫感がある。(なほ子)

椰子の木にうつすら雪の積もりけり

篠田大佳

いつも不思議に思ふことがある。サボテンは暑い地方の植物といふイメージなのだが、アロエは冬に花つける。椰子も日本の風景に馴染まないと個人的にはおもふ。似たやうな植物のシユロは温帯を好む椰子科シユロ属とある。椰子は島崎藤村作詞・大中寅二作曲の『椰子の実』で親しまれてゐる。椰子の木に積もつた雪を見て作者も新鮮な違和感を持たれたのだらう。(喜孝)

『エキバン』で固めし小さき輝ひと

須賀敏子

液体絆創膏で輝を固めている様子を切り取っています。輝はまだ小さく、しっとりとした患部の様子を想像します。そして、「エキバン」というシンプルな商品名に、都市部のような消費生活ではなく、文化的な作者の生活を想像します。(大佳)

葱刻む役は夫に譲りけり

須賀敏子

孟子の「君子遠庖厨」の本意を日本で変化して「男子は厨房に入らず」となったといふ。これはある時代まで男性そして女性の云ひ分であった。今はとつくに死語になってゐる。昭和生まれの敏子さんには、少々この觀念が残つてをられるのかも。特定の厨仕事を夫に譲つてあげたと、思ひやりのあるお言葉である。夫婦間の些細な変化もこの様に詠まれるとほのぼのとした家庭のやうすが伺へて面白い。(喜孝)

所在なきベンチがひとつ冬紅葉

都築繁子

公園の風景でしょうか。公園の中心になく、かつ、人通りがさほど大きくないベンチがひとつばつんと置いてあるようです。冬紅葉は、寒い公園の中に視覚的な温かさを感じる様子です。気付いたら、ベンチの「所在なき」に感情移入してしまっていることに気付かされます。(大佳)

所在なきベンチがひとつ冬紅葉

都築繁子

ベンチがひとつだけの小さな公園なのか、空いているベンチがひとつだけの状態なのか迷った。小さな公園として読んでみた。「所在なき」を改めて辞書を引く。「退屈」と明快に一言。ベンチが退屈するはずはないが、云はれてみると公園の様子を象徴してゐる。冬紅葉が寒さうに見えてきた。後者として読むと冬紅葉が鮮やかに輝いて見えてくる。どちらか迷ったが答が出なかった。

(喜孝)

黒雲へ太陽切り込む年の暮

長崎桂子

黒い厚い冬の雲、その隙間から日の光がさつとさした。そんな光景を桂子さんは「太陽が切り込む」と表現されました。力強くユニーク、成功した擬人化の例だと思う。ただ、「年の暮」という季語は世俗的なので、ちょっともったいないと思いました。(なほ子)

桂子さんの年の暮の所感。なかなか力強いものがある。一見太陽へ黒雲が近づくかに見えるのが大分だが、桂子さんは果敢に黒雲の大群に太陽が切り込むやうに見た。主客を取り替へ力感のある作品を作られた。(喜孝)

あをキーワード俳句辞典(よーよき)

句末の「よ」

せせらぎの水面に跳ぬる春の日よ 篠田 大佳
白檀の走り根涼し姫塚よ 篠田 純子

あがり

夜あがりの道に梅の花どこか 佐藤 喜孝
夜あがりのあぢさゝの珠をもちしまま 佐藤 恭子
夜あがりの粒をいだきし濃あじさゝ 佐藤 恭子

夜遊び

夜歩きの人を囁して青松虫 森 なほ子

宵

酒舌に苦き宵なり羽蟻くる 田中 藤穂
螢草壺に無聊の宵灯す 後藤 志つ
宵寒や灯らぬ家の影濃ゆし 山莊 慶子
手をつなぐ宵のふたりや沈丁花 赤座 典子
バス停にひとり加はる花の宵 吉成美代子
はくれんの遠くに霞む宵の闇 山莊 慶子
耳たてて虫の音探す今宵かな 鈴木多枝子
宵星やふつつ熟る桜桃 渡邊 友七
牡丹園欝泣す宵の雨を得て 渡邊 友七
俯ける宵の木槿に迎へられ 赤座 典子
夫の背を搔いてゐる宵鉦叩 齊藤 裕子
秋立つや今宵も二合米を研ぐ 齊藤 裕子
枯葉鳴る今宵のラジオここまでに 長崎 桂子

青々とあさがほ宵は鎬色に 堀内 一郎
白桃に一抹の紅宵の湖 長崎 桂子
けだる気な猫の流し目宵風鈴 篠田 純子
巻きなほすマフラー宵の明星に 長崎 桂子
ぶらんこの揺れの残れり宵の庭 山莊 慶子
元日の干しもの下がる宵の道 佐藤 喜孝
夕顔や安らぐ宵を齎せる 長崎 桂子
虫すだく宵を歩めば懐かしき 長崎 桂子
冬座敷今宵の客はふたり連れ 秋川 泉
宵の風背筋ひやりの葉月かな 長崎 桂子
虫すだく今宵華やぎ賑はしき 長崎 桂子
赤蜻蛉宵の明星見える頃 大日向幸江
福熊手担ぎしをのこ宵の駅 秋川 泉
ゆつたりとあいづち踊の宵深む 佐藤 恭子
虫すだく夕べ今宵も賑賑し 長崎 桂子
今宵また殿様になる干蒲団 七郎衛門吉保

良い

病み上りに日本酒が良い秋の雨 堀内 一郎
紅梅や明日より今が良いものを 東 亜未
良い話抜げる友や梅日和 長崎 桂子
青空が良い一日の寒さかな 堀内 一郎
こち良い風の流れや草紅葉 長崎 桂子
悪い子も良い子になつてさくらんぼ 赤座 典子

良い本に巡り合うた日花菜漬
春満月きつと良いこと有りさうな
丁度良い君との距離よ草の餅
好い
風邪の床好いことだけを考へやう
去年今年好い湯加減に包まれたつ
酔ひ心地
濁酒はや酔ひ心地飛驒の旅
よいしょ
土俵入よいしょよいしょと春を呼ぶ
余韻
句座帰り余韻のごとくちちろ聞く
一服の新茶の余韻鹿威
春夕べ鐘の余韻の棚引ける
読終へて余韻極上秋澄めり
梅の香や映画の余韻消えぬまま
春の風邪旅の余韻と混沌と
送り火の消えて余韻の香を焚く
映画見て余韻のベンチうららけし
酔ふ
醍醐寺や百八十年の花に酔ふ
屠蘇に酔ふしづかなる刻過ぎてゆく
街に出て青葉楓の風に酔ふ

須賀 敏子
須賀 敏子
須賀 敏子
松本 米子
森 理和
長崎 桂子
田中 藤穂
芝宮須磨子
森 理和
長崎 桂子
赤座 典子
須賀 敏子
赤座 典子
秋川 泉
赤座 典子
須賀 敏子
早崎 泰江
佐藤 恭子

採れたての葡萄シヨパンに酔ふごとし
用意
秋晴やランチの用意して待つ子
岩棚をとびだす用意冬すみれ
老い送る用意の日日の羽抜鶏
翡翠や用意されぬ御立台
終や喪中の葉書用意せり
初時雨明日の用意を改める
夜更しの共に生姜湯用意して
はや葦簀用意に疲れカミモール
台風の来覆ひて縛り用意かな
妖怪
納涼船女装集団妖怪編
妖怪が月を退け春嵐
妖怪はここには棲めぬ麦畑
羊羹
羊羹の切りくち乾く花の昼
眼に留る青竹筒の水羊羹
髪切りて水羊羹を玻璃の皿
未明には未明の記憶水羊羹
水羊羹皿ごと冷し客を待つ
よく冷えて角立っている水羊羹
水羊羹顔映してはわらひこげ

東 亜未
江倉 京子
佐藤 恭子
東 亜未
赤座 典子
森 理和
長崎 桂子
須賀 敏子
長崎 桂子
長崎 桂子
篠田 純子
東 亜未
森 理和
後藤 志つ
長崎 桂子
赤座 典子
芝 尚子
木村茂登子
木村茂登子
佐藤 恭子

趣の青竹筒に水羊羹
×張のあとは羊羹女正月
冬霞挽茶羊羹色の河
寒雀人好き羊羹もつと好き
芋羊羹のごとき畔冬の草
洋館
洋館に卯の花咲いて人の影
さくらんぼ熟れて洋館古りにけり
樟大樹西洋館の今朝の秋
窓広き洋館建ちぬ村の秋
洋館も茶室も春の園の内
朽ちさうな洋館の白五月闇
洋館の小さき窓越し春の海
町騒を遠く洋館夏木立
夏みかんぼんやり灯る西洋館
洋館が建つ丘への入道雲
溶岩
溶岩の重なる景色やなざらん
北風が研ぐ溶岩くろくろと照らひをり
溶岩を鷲づかみしてもみぢの根
雲浮ぶ溶岩の裾野の濃竜胆
溶岩の流れし跡に富士薊
溶岩流芽吹くすかんぼ濃く強く

石森 理和
篠田 純子
森 なほ子
佐藤 恭子
七郎衛門吉保
須賀 敏子
田中 藤穂
東 亜未
定樞じょう
木村茂登子
鎌倉喜久恵
森 理和
須賀 敏子
吉成美代子
定樞じょう
芝 尚子
渡邊 友七
吉成美代子
芝 尚子
須賀 敏子
森 理和

春の風五体に響く溶岩流
陽気
陽気なるガイドと歩くお花畑
内股も陽気も父似稻を刈る
養魚
養魚場すこし離れて田水張る
養魚場フィルム曇りに梅雨兆す
用具
昭和の日常生活用具展示会
春色の筆記用具のカシャカシャと
陽光
下校の子陽光ほそきいぬふぐり
王林陽光北斗花咲ジヨナゴールド
容姿
着膨れて容姿気にせぬ齢となる
水仙の寄れぬ容姿やひとりごつ
幼児
着ぶくれし幼児の通る磨硝子
春うらら幼児呼び合ふフルネーム
用事
鴉には鴉の用事梅雨晴間
夕虹に常の用事を忘れたり
亀鳴くや用事そのまま日の暮るる

森 理和
須賀 敏子
田中 藤穂
竹内 弘子
竹内 弘子
長崎 桂子
赤座 典子
赤座 典子
長崎 桂子
長崎 桂子
赤座 典子
東 亜未
赤座 典子
佐藤 喜孝
長崎 桂子
秋川 泉

洋書
 ルンペン の枕の洋書春浅き
 幼少
 幼少の面影残る帰り花
 様子
 診断は様子見ませう石路の花
 用水
 真夜中の用水桶の子子たち
 用水路ボール浮びて水温む
 花過ぎや淡紅色の用水路
 用水路わがもの顔の水馬
 羊水
 羊水をおよぎきつたる夏の朝
 海水は羊水台風またも産み
 妖精
 氷上の妖精の舞酔ひしれぬ
 虫狩の白は妖精ただよへり
 妖精のやうな顔して蓮ひらく
 幼稚園
 幼稚園雪囲とる父集ふ
 幼稚園なんてキライでいちご好き
 ぶらんこの綱真新し幼稚園
 春の風幼稚園児の縄電車

関口 ゆき
 長崎 桂子
 須賀 敏子
 竹内 弘子
 山荘 慶子
 山荘 慶子
 早崎 泰江
 佐藤 恭子
 森 なほ子
 森山のりこ
 森 理和
 鈴木多枝子
 田中 藤穂
 篠田 純子
 長崎 桂子
 東 亜未

松落葉幼稚園には馴染めずに
 懐かしき幼稚園なりいぬふぐり
 幼稚園児の声撥ね返る水の秋
 北風や幼稚園まで手を繋ぎ
 腰痛
 腰痛の消えてはもどる桜冷え
 腰痛を暗がりにをき紅葉山
 この頃は頭痛腰痛夏嫌ひ
 羊蹄山
 雲の峯羊蹄山を真向かひに
 羊蹄山の森林限界岩袋
 羊蹄山汗と涙の三角点
 羊蹄山の裾に噴く水靄立てて
 洋服
 如月の洋服ダンス開きたる
 葉脈
 葉脈のまだづきつきと落葉かな
 葉脈は綺麗に残す田螺蛸
 落葉掃く葉脈きれいな自然界
 陽明門
 梅雨明けの陽明門に遊びけり
 ヨガ
 そら豆や三点倒立ヨガ修行

篠田 純子
 長崎 桂子
 篠田 純子
 田中 藤穂
 鈴木多枝子
 堀内 一郎
 大日向幸江
 芝宮須磨子
 須賀 敏子
 須賀 敏子
 森 なほ子
 長崎 桂子
 篠田 純子
 森 理和
 長崎 桂子
 須賀 敏子
 森 理和

夜の雨呼吸深くしてヨガの秋
 花の雨小走りに行くヨガレッスン
 夜風
 耕して藪に夜風の音たまる
 十葉や夜風をいれてねまりたる
 旅枕夜風昂る竹柏の蝉
 大川の夜風に乗って盆太鼓
 予感
 夢々に元朝晴るる予感あり
 物干し場早や物掛かり暑の予感
 手の甲や予感蚊に狙はれてゐる
 夜鴉
 春の月夜鴉かうとただ一声
 ひとこゑを放つ夜鴉鉦叩
 夜鳥の一声太し溽暑かな
 夜鳥に目で合図して冷し酒
 夜鳥と枕のあひだやへざくら
 夜鳥の声のながなが月夜かな
 良き
 機嫌良き野鍛冶のリズム青田道
 寒鳥ながめ良きかな枝の上
 去る人の良きことばかり沈丁花
 耐へをれば良きこともあり白牡丹

秋川 泉
 秋川 泉
 渡辺 友七
 佐藤 恭子
 渡邊 友七
 須賀 敏子
 佐藤 恭子
 定樞じょう
 鎌倉喜久恵
 佐藤 恭子
 鎌倉喜久恵
 佐藤 恭子
 佐藤 恭子
 佐藤 恭子
 秋川 泉
 篠田 純子
 山荘 慶子
 山荘 慶子
 山荘 慶子

住き人の道ひろいくるはだら雪
 春の野にいろどりの佳き「あを」三とせ
 枝ぶりの良きとこ探し懸大根
 秋うららホテルのランチ佳き人と
 江戸風鈴良き後継の育ちをり
 映画なら良き亜米利加で遠案山子
 威勢良き人が隣に秋の雨
 焼餅の焦げの加減の良き雑煮
 白足袋や女将の笑顔良きお店
 良き事で埋めてゆきたし初暦
 姿良き繋ぎの浴衣男の子かな
 咲き揃ふほど良き高さ立葵
 初時雨けふは良きことありさうな
 黄水仙草の中より良き兆し
 数うれば良き事もあり茄子の花
 立冬や湯の加減良き貰ひ風呂
 干菓子には程良き湿り寒の雨
 良き事も些か残し菜種梅雨
 小春日や医師も機嫌の良き術後
 神佛は良きにはからへとクリスマス
 佳き話聞く紅梅の日溜に
 逃水や外見は仲の良き夫婦
 新緑の水際に立てば佳き人に

鎌倉喜久恵
 芝 尚子
 鈴木多枝子
 芝 尚子
 田中 藤穂
 須賀 敏子
 森 理和
 木村茂登子
 田中 藤穂
 鈴木多枝子
 芝宮須磨子
 鎌倉喜久恵
 佐藤 恭子
 早崎 泰江
 齊藤 裕子
 木村茂登子
 森山のりこ
 森山のりこ
 木村茂登子
 木村茂登子
 芝 尚子
 篠田 純子
 佐藤 喜孝

絵ごころのなかりし絵にも春の風
亀田虎童子

音にしてギギギギギッギ霜柱
佐藤 竹僊

願ひ事一つ入れ替ふ初詣
赤座 典子

むべなるかな白い御飯と寒卵

金柑の種を許せる甘さかな

寒三日月刀架にひたと収まれり

初護摩の炎は高く濃くなりぬ
秋川 泉

癸卯はづみをつけて苦を越えよ

ラジオから箱根駅伝若湯かな
七郎衛門吉保

願ひごと多くなりけり初詣

寶船神みつしりと乗合へる
篠田純子

大鷹野縄張主張の群れ鴉

正月や街懐かしむホームレス
篠田 大佳

剥き出しの鉄骨天を指して雪

寒ぬくし今日は返却本を背に
須賀敏子

階の手摺りの冷えや参拝す
都築繁子

穏やかや朝日に映える実千両
長崎桂子

睦月の卒寿なり全てに感謝の合掌

冬温し犬の喪中といふハガキ
森なほ子

新聞の嵩に驚くお元日

喜孝抄



あとがき 庭

わたしの庭、といつても目測で東西に二間半南北に一間半。南北は建物に挟まれてゐる。借りた時は全く何も生えてない地面むき出しの状態だった。住んでからも知らぬ間に貸主が無断で雑草を定期的に除去してゐることがわかり断った。おかげで今はハハコグサ、チチコグサ、ハルジオン、トキワハゼ、アカバカタバミ、ノアザミ、ドクダミ等が勝手に生えてゐる。その中に藤穂さんからいただいた黒竹は鉢の中で竹の子を伸ばしている。また藤穂さんが手ずから掘り出していただいた茗荷が二年目になり、数を増やして一隅を占めている。中野住の時いただいた立浪草は元気で鉢といふ鉢に飛び移り、それでも足りず道の端にも花を咲かせるほど盛況であった。が数年後あつという間に姿を見せなくなった。ところがこの春置いてある鉢の影に去年見かけなかった花が咲いてゐる。ホトケノザかと思つたが、どうも違う立浪草である。なぜここに立浪草が咲いているのかわからないが、鉢を運んでくる時ついてきたの

だらう。これで藤穂さん三物揃で春から縁起がいい。

手紙

大事な手紙が四通 “借りぐらしのアリエッティ” に持って行かれた。心当たりを探したが見つからず「五月号原稿」を四月号に使はせて頂いた。申し訳なし。『飛行船』・『獐』と何年も原稿を預かってきたがアリエッティに付け込まれるとは。誕生日を機に己に発破をかけたところ。
(喜孝)

二〇二三年四月号

発行日 四月二十七日
発行所 〒177-0042

東京都練馬区下石神井一丁目六の三
サンハイツ石神井2 一階
電話 090 9828 4244

印刷・製本・レイアウト 竹僊房

カット／須賀忠男・福井美佐子・テイリ エイマ

表紙・佐藤喜孝
会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年

ゆうちょ銀行(普) (店番018) 4586402
佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)